



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

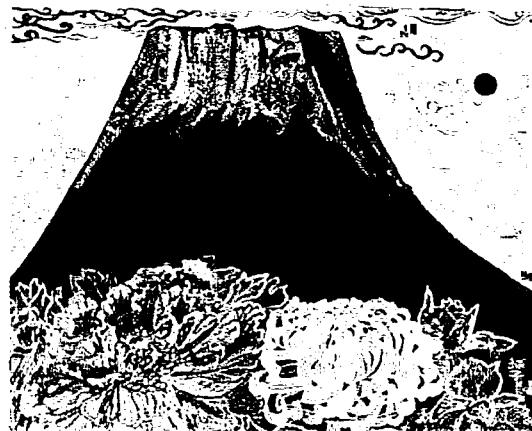
2006年9月発行(3ヵ月1回発行)

第32号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 ●貧しい国々での医療活動を支援 ●各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

(社) 海外と文化を交流する会の誕生から38年、そして当会から豪州に現代日本画25点を寄贈してから29年、その日本画25点を、「日豪交流年」に展示することが決まりました。この会報を「日本画特集号」とします。下の絵は、そのうちの2点——左・奥村土牛画、右・片岡珠子画。



豪州での日本画展特別号

■メルボルンに行きませんか

今年の日豪友好条約締結から30周年を記念した「日豪交流年」です。これまでもいろいろな行事が開かれてきましたが、この交流年の末尾を飾る大イベントとしてメルボルンで開かれる「現代日本画展」があります。これまで会報でもこのイベントのことは紹介してきましたが、いよいよ実現することになりました。どうぞこの会報をご覧になりメルボルンの日本画展への参加を考えてみて下さい。季節は緑が美しくなる初夏の頃、しっとりと美しい街メルボルンで、当会が29年前に成した、日本の誇りとなる大事業として寄贈した日本画の展覧会が開かれる

のです。

メルボルンの領事館も現地の日本人会も大歓迎して下さいます。オーストラリアの人たちも、日豪交流年のこのイベントのことをとても大切に思ってくれています。良い季節に美味しいワインもシーフードにぴったり合います。

私たちと一緒にメルボルンに行きませんか

(社) 海外と文化を交流する会 理事有志

日豪交流年記念 現代日本画展

2006年11月20日～12月8日

- ビクトリア州議会議事堂
クイーンズホール (11月
20日～24日)
11月20日(月)
芸術大臣主催 レセプション
- 王立メルボルン工科大学
(RMIT) ギャラリー
(11月27日～12月8日)
11月29日(水)
アーツ・ビクトリア所長主催
レセプション



クイーンズホールのあるビクトリア州議会議事堂

- 11月28日、29日(予定) 「日本画と日本の美」に関するシンポジウム
講師：北條正庸画伯、George Gish氏(当会会長)

■ごあいさつ

(社) 海外と文化を交流する会

2006年日豪交流年にメルボルンで再び現代日本画展が開催されることを非常に喜んでおります。

1970年頃から日豪経済交流が大いに発展しました。オーストラリアにとって日本は最大の輸出国となり、資源のない日本にとっても石炭や鉱物などの天然資源を購入できる点でオーストラリアはとても大切な国となり、将来の友好関係をますます深めていくことが望まれました。

私たちの会は、両国の信頼を深めるためには貿易以外に文化を通じた心の交流が重要であると考えました。そして、その一歩として、日本の心を表現する芸術である日本画を紹介することを企画しました。そこで、この文化交流の趣旨を、多くの文化勲章受賞者を含む当時の日本

画の巨匠たち 25 人に理解してもらい、それぞれ 1 点ずつの絵を描いてもらうことにしました。こうして 5 年の歳月をかけて完成した日本が誇る現代日本画 25 点を 1977 年にメルボルン国立美術館で展示することができました。

この展覧会のあと、日本に持ち帰ることをせずに、オーストラリアの人たちに、いつでも日本芸術に触れて日本の美しい心を知ってもらいたいと、これら 25 点の日本画をオーストラリア国民に寄贈したのです。

この事業は私たちの会にとって、その歴史に華やかな 1 頁を飾るとても誇らしいでき事でした。今年再び、この 25 点の日本画が一堂に展覧されることは大変うれしいことであり、これを機会に今後ますます両国の文化交流と友情が深まることを期待します。

■ 日本画・日本の美

日本を象徴する色彩は「白」……。木々山々が霞む様子、日本の自然を潤わす水蒸気、雲、霧、雪、霜を描くとき白い絵具で表現するのではなく、和紙や絹の生地の白さを活かし、「白」と感じさせるところ以外のところを絵具で表現する。描かれていない美しい和紙また絹そのものの本来の白さは、みごとに雲や霧や雪、遠くに霞む風景を表現する。「白」はまた「余白」の意味も象徴的に感じさせる「空間」、それは空気感ではなく、なにも無い「空」という精神の型を表現する考え方である。これが日本画の根底にある。

そして、もうひとつの重要な日本画表現の「心」は「光」にある。ある事物を観察し、それを表現するのに「光」は必要欠くべからざるものであり、これは古今東西同様である。西洋における「光」は時刻を示すとともに、光の方向によりその情景を表現する重要な意味ももっている。日本画においては「光」は永遠なるものとし、発光体は「白」という考え方に立ち、光は事物に正面から当てられ影はその真うしろにある。そのため事物が、立体的かつ即物的に存在するよりも、不変的に、より精神的に存在するものであるとして、平面的に「線」という表現で「美」を描こうとするのが日本画の心である。

日本画の表現技術では現代にあっても、人類が最初に絵画を表現しようとした原初的な形態を留めている。すなわち、基本的に化学物質を使用せずに岩石や土、植物などを色料の原料とし、動物の骨、皮などから抽出された膠(にかわ)を用い和紙や絹の上に描画する。昔から頑固に守られてきたこの絵画技術の伝統は、すべてに自然との融和を大切に想う日本文化そして日本画の精神性によるものであろう。古代、壁画や和紙にこれらの画材を用いて描かれた仏画や肖像画などが、幾多の高温多湿の夏、低温乾燥の冬を耐え千年以上の年月を経てなお数多く残されている。

これらの作品群およびその伝統を守りながら描き続けられて来た日本画は日本文化の最大の誇りである。

■ 1977 年の日本経済新聞記事より (昭和 53 年 6 月 3 日付)

日豪の心日本画で結ぶ

◇ 現地で開いた展覧会の全作品を寄贈◇

松岡 朝（まつおか あさ、社団法人「海外と文化を交流する会」常務理事）

文化交流の立場で全力

私はこの七月で八五歳になる。幸いに元気で人並みに動けるのは何よりうれしくありがたいと思う。この長い年月の間にはいろいろなことがあったが、一番うれしかったことは昨年の秋オーストラリアにおいて、現代の代表的日本画二五点の展覧会を開きそのすべてを寄贈したことである。

この展覧会には、故川崎小虎、奥村土牛両先生をはじめ橋本明治、上村松篁、山口華揚、高山辰雄の諸先生などの現代日本画壇第一線画家たちが出品してくださった。私は美術界とはなんの縁もない人間であるが、この事業が成功したのは今は亡き佐藤栄作元首相や河北倫明、京都国立近代美術館長の懇切な助言や励ましがあつたからである。さらに麻生和子さんはわざわざオーストラリアの現地へ駆けつけて下さり、私のために何かと細やかな心配りをして下さった。

オーストラリアの人々はほんとうの日本画をほとんど知らないので、今回のすばらしいプレゼントにR.J.ハーマー・ビクトリア州首相をはじめ多くの人々が非常に喜んでくださった。首相は開会式に祝辞をのべられ、「今回のことは、オーストラリアと日本とが平和条約を結んだことよりも、もっと深く両国民の心を結んだ」と述べられたほどだ。会場では日本画を初めてみる人々から奇問が百出した。

例えば「この絵は一体何の上に描かれているのか。日本はシルクの国だと聞くが絹に描いたものか」といった質問がまず出た。これには「赤道上を通る時、絹だと熱で破れる恐れが大きくて使えない。これらの絵は日本に古くから伝わる白麻紙という紙に描かれている」と答えると「白麻紙とは何か」とくる。そこで正倉院の昔から伝わる和紙の歴史を手短かに話さねばならぬ羽目になってしまう。向こうは土地の相当なインテリたちなのに、日本に対する知識たるやこのありさま。私たちは何とか日本と日本文化への知識を深めてもらおうと大汗をかくことになった。とりわけ、油でもなく水彩絵の具でもない日本画特有の岩絵の具にはことのほか関心が高かった。素人の私にはうまく説明できないので、そのつど同行の額装の多聞堂の岡村会長をわずらわした。

私たちの「海外と文化を交流する会」は、昭和四十三年外務省所管の社団法人として設立された。日本と海外諸国との文化交流を美術を通してはかり、国際理解と親善をより強いものにしたことが設立の趣旨である。国内での展覧会は新聞社などの共催で何回か開いたが、外国での催しはなかった。私は四十七年の理事会で、外国での展覧会開催を提案し全理事の賛同を得た。そして、比較的わが国との文化交流の機会の少ないオーストラリアで現代日本画の展覧会を開き、日本画コレクションとして全作品を寄贈しようということに決まった。その後五年



1977年9月、豪州ナショナル・ギャラリーの日本画お披露目パーティーでヘイマー・ビクトリア州首相と談笑する松岡朝。

間、会をあげて美術界、関係官庁、実業界等の理解と援助をうけるために全力をつくした。

その間の苦労は、ようやく実現できた展覧会の喜びの前にはとるに足らぬものだったと思う。とりわけ帰国後に皇太子殿下ご夫妻より特別のお召しを受け、今回の展覧会についてお話ししたところ、両殿下ともたいへん喜ばれたことは生涯忘れることができない。

海外体験が大きく影響

それにしても、私がこうして海外との文化交流に尽くそうと思うのは、私のこれまでの長い海外体験が大きく影響している。私をこのような国際派の人間に仕立てあげてくれたのは父である。私をはじめアメリカに行ったのは、一九二二年のことであった。津田英語塾本科一年を終了した後、父が在日宣教師ヘイゲン夫人を付き添いとして依頼し、天洋丸という舟に乗って太平洋を渡った。

出立に際し父は、「男女同権とはいっても女は弱い。しかし強い教育を受ければ必ず強くなると信じる。どのように細くともいい、日本と外国とをつなぐかけ橋になれるような学問を身につけてほしい」と言って自分で書いた錦の表紙の本を渡してくれた。それには二十八章にわたって海外留学の心得がくわしくのべてあった。私は親心のありがたさを深く感じて、八十歳を過ぎた今でも、その一句一句を忘れることができない。

本国日本を離れたら体を大切に健康第一とする。これが第一章。第二章は、持っている金銭を大切に、その一銭を失うごとに自分の身内を失っていくと同じだと思いなさい。次いで「たとえ他人の家に寄宿し金を払っているとしても、常にその家の人々に仕えているという謙譲の気持をもっていること」「人と議論をする時には自説だけに固執しないで相手方の意見も入れるという互譲の精神をもっていなければ、共通世界に住むことはできない」「病気になる時には直ちに医者にかかり、他人のすすめる薬はたとえ親切であっても軽々にのんではいけない。ただし命は天のものであるから病を恐れず安心して医者にかかり、うろたえることなく泰然自若としていなさい」—というふうが続いていた。

父の心得書を座右に

私はこの父の海外留学の心得書をいつも座右においていた。コロンビア大学大学院での最後のドクターの試験を受ける前夜も、それを読んで心に何ともいえない安らぎをおぼえた。そして翌日の最終試験をパスすることができた。

その博士論文「労働婦女子の保護法」は米連邦政府印刷局より出版されるという名誉ある待遇を受けた。その間私は、メトロポリタン美術館の武器武具部長バシフォード・ディン博士の助手を務めたり、マサチューセッツ州スプリングフィールド市のスミス・アートミュージアムの日本部キュレーターを務めたりした。博士課程を全部完了した昭和八年、日本に帰国した。

私は常々中国のことを知りたと思っていたので、翌年、故新渡戸稲造先生のすすめもあって中国に渡った。その後南京の日本大使館の清水書記官の助けを得て南京に中国児童のための「南京児童学園」を設立して子供たちの世話をした。戦時中はずっと南京で学園を続けるかわら貧民救済の仕事にもたずさわり終戦の翌年帰国した。

世界へ親切の輪広げたい

その後私は日本の子供たちの痛ましい現状をみるにしのびず、当時国連のユニセフから日本

に来ておられたストレーラ女史と相はかり「日本ユニセフ協会」を設立して初代の専務理事になった。国連本部のユニセフ執行理事会には昭和二十九年から七回、会議に出席し、日本はもとより恵まれない世界の子供たちの福祉のために微力をつくした。

このようにささやかではあったが、私は常に国際的視野に立って働いてきた。このことは亡き父の教えであった。そして滞米中の私に対するアメリカ人の親切がいつも私の心の支えになってきたことを強調しておきたい。これからももっともっと世界へ親切の輪を広げたいと思う。

■ 「文化交流の痛みと喜び」

——2006年日豪交流年と「海外と文化を交流する会」の関係と意義

ジョージ・W・ギッシュ（社）海外と文化を交流する会会長

今年は、2006年日豪交流年（YOE）と定められました。この交流年は、日豪友好協力基本条約（1976年）の締結30周年を記念するもので、その目的は、特に草の根レベルでの両国間の友好関係、相互理解、協力をさらに深めていくことです。

実は、この日豪協力基本条約が締結された同じ時期に、「海外と文化を交流する会」がいち早くその目的を果たそうとしました。1976年に会の創設者松岡朝氏の尽きせぬ努力によって、東京の日本橋三越で「現代日本画巨匠25人展」を開催した後、その25点をオーストラリアに贈呈することになりました。そして、明くる年、メルボルン・ナショナル・ギャラリーを始め、各地の展示会が開かれました。その後、ナショナル・ギャラリーに保管することになりましたが、長年に亘って、その行方ははっきり分かりませんでした。

幸いに、最近その日本画25点の所在の確認が出来、また、ヴィクトリア州芸術大臣メアリー・デラハンティー氏の協力を得て、今年の秋に、メルボルンで「日本画25点記念展示会」を開催することになりました。その「記念展」に向けて現地の会場等色々な準備が行われています。日本側から、多摩美術大学教授の北條正庸画伯が「日本画及び日本文化の歴史と心」の特別講演活動を始め、私（ギッシュ）も「文化の違いから学び合う国際交流」のテーマで話す予定です。その中で、わが会のオーストラリアと日本画を通しての文化交流の「痛み」の意味に関する原点に触れたいと思います。

先ず、30年前の会の関係者にとっては、当時の一番価値のある日本文化の遺産の一つであった日本画を今まで比較的文化的交流の少ない豪州に贈呈することによって、相手国の感謝と喜びが得られることを願いました。しかし、その価値は充分理解されずに、30年間贈呈された25点の日本画が粗末に扱われたことを知り、かえって痛みを覚えました。そこで、私たちが、その痛みを通して、本来の文化交流の意義について、深く考えさせられることとなりました。自分の心にある価値観と他者の価値観の違いがあること自体は、異文化交流の一つの原則でもあります。その違いを理解するために、何をすれば良いのか、どのような交流が必要なのか、この経験から検討する機会が与えられました。

その結果、今度の記念展の前後、日本画と日本文化の理解を深めるために、様々な催し物を企画することになりました。秋の展示会と講演会はその第一歩であり、その後の日豪の美術

教育交流プログラムも近い将来に向けて優先することを願っています。

日豪関係を62年前に遡れば、あのカウラ事件を思い起こします。1944（昭和19）年8月5日、午前2時、豪州カウラ捕虜収容所日本人キャンプに突如出撃ラッパが鳴り響き、喚声と共に日本人捕虜の突撃が決行された。その後、カウラの市民の手によって、犠牲となった日本人捕虜の墓地が建てられ、今でもそれを守っていることを知り、こうしたお互いの痛みを分かち合うことによって、人間の心と文化の交流がはじめて、可能になります。そこで、互いの喜びも生まれてくるものと考えます。

■日本画・日本の心

北條正庸 日本画家・創画会会員、多摩美術大学教授

このたびの2006年日豪交流年における豪州メルボルンでの日本画展の開催にあたり、縁あって当地におけるシンポジウムに参加する大役を引き受けることになりました。海外と文化を交流する会会報に一言とのご依頼、しかしこの大役はよくよく考えれば少々荷が重すぎる、と今さら反省しながら筆をとる次第です。

というのも、海外と文化を交流する会の尽力で1977年に実現した「日本の心を海外に届けよう」との趣旨に賛同した25人の作家の作品展と、豪州への作品寄贈は、当時を考えると趣旨はたいへんにすばらしいものの、これだけのメンバーを一堂に会することは、たいへんに困難なことではなかったかと想像します。25人の作家おひとりお一人、第一線を走る方々で、私の口からいうのもたいへん恐縮なことですが、人気作家の先生方でありますから、その作品を一堂に集めて展覧会を催す、さらにその作品を寄贈することは大きな資金と力が必要であったにちがいない。てや、海外での展覧会となると順調にいかないのがあたりまえ。それを実現し、今、その25人の作家の作品がオーストラリアにある事実は、とてもすばらしいことです。

また、それを無償で力を尽くされた海外と文化を交流する会の方々の力がひとつに結集して、実現したことと思います。このたび、この事実を知って、大きな驚きでした。

しかもその作品をもって再びオーストラリア・メルボルンでの日本画展が29年ぶりに開催されることになった、とてもすばらしいことです。そしてこのたびも海外と文化を交流する会の方々の尽力があることを度重なる会合で知り、私に何ができるのかと問いただす日々です。

「日本の心を海外に届けよう」との趣旨で国際交流がおこなわれ、日本画の作品が海外に渡り、そしてその作品がどのように受け入れられて、国際交流の目的が十分に果たされてきたかがわかるのだろうと思います。しかもこうして再び多くの努力によって日本画展の開催になったのは、とてもうれしいことです。

私の個人的な立場であらためてこの25人の作家の方々の顔触れを拝見して、たいへん懐かしい思いを抱きました。おふたりの作家が私の大学生のときの恩師でした。おひとりは私が日本画家として歩み出したいせつな指針を示してくださった先生でした。もうひとりの方は、現在、後輩を教える立場になった私が、師の師たることを今、その先生の姿を通して感じさせてくださった方でした。

歩みの一步一步はとてもゆっくりで、その軸はぶれることなく一新に作品に向かい、茶の心

を伝え、歌を詠んでは教え子に贈り、教え子の作品とて穴があくほど見つめてくださった。そのおふたりの先生から教授されたものは日本画とその心でした。まさしく、このたびの日本画展の起点でもあった「日本の心を海外に届けよう」の日本の心は、まさしく日本画のなかにあります。紙と墨と顔料と膠を使って表現する絵画の中には、日本の心があります。そしてそれを伝えることができるすばらしい絵画技法であるといっても過言ではないと思っています。

このたびのメルボルンでのシンポジウムでは、日本の心を豪州の方々に再認識していただくために、日本画の一点一点の作品を通して「日本画とは」と問いかけ、日本の文化そして心(精神)を指し示し、理解していただければと願っています。

具体的に日本画の技法の指導ができればよりわかりやすいと思いますので、その計画も予定しています。なお、大学の交流についても実現可能であるかどうか、このすばらしい機会に扉をたたいてみたいと思っています。

以上のような計画で私に科せられた課題としたいと思っています。この会を通してまたは会報を通して、機会があれば、日本画についてゆっくりお話しすることができると思います。

■中世を持たない多民族国家オーストラリア、アメリカとの比較

大谷俊介 (社) 海外と文化を交流する会 常務理事、電気通信大学 教授

はじめに個人事情の紹介をひとつ。アメリカの行政や外交が今の体制になってから、私は個人的にアメリカと絶交した。テレビからテキサス訛りの演説が流れると、あわててチャンネルを変える。ただし、絶交中と言っても、私がアメリカに行くのを止めただけで、重要な話や会合があれば日本にいる間に、あるいは必要なら先方が日本にいる間に行うか、あるいは必要なら来てもらえば良い。片側通行の個人的絶交状態が続いている。

中国ともしばらく前までそうだった。あの天安門事件が起って以来10年間絶交した。ただし、やはりその期間でも中国からの留学生や客人などは喜んで日本に迎え入れていた。そして、数年前にやっと絶交状態を解禁した。今では年に数回中国と行き来をしている。

私には仲の良いアメリカの友人がいる。その中で南部出身者が数人いる。彼等は自分の南部訛りを誇りにしているようだ。拙い語学力の私でもそれと判る、(あの嫌いな演説とは違う、) まるで詩を朗読しているような流暢な南部訛りを強調して会話や演説を聞かせてくれる。彼等とは今も時々日本で会っている。

その土地の特徴を示す美しい訛りと話し方が存在するのは、そこでの文化が熟成されているためであり、あとで述べるようにアメリカは新興国家ではあるが、この点でも独自の文化を持つようになっていると言える。

さて、今回は上のタイトルで、すなわち、国家の成り立ちとそこで育つ文化について考えてみたい。

中世を持たない点ではオーストラリアもアメリカも同類である。両国で時代は少し違うが、島流しにあったアングロ・サクソン系の囚人を主とする大量の移民がそれぞれの大陸に渡り、そこに定住し国を造った。そして、そこに古くから住み着いている少数民族である先住民を虐

殺し駆逐した点でも両国は似ている。これらの先住民、ネイティブ・アメリカンやアポリジニには、それぞれ太古から育んで来た文化があり、その意味では、米豪が中世を持たない、というのは彼等に失礼な話であるが、ここではそれを追求しない。両国とも先住民虐殺というつらい歴史を持ってはいるが、「新世界」に渡った人たちが、苦労を重ねながらも強い精神力で自分たちの住む地域を自らの手で広げていった状況も同じである。良くも悪くもこの開拓者魂が両国の国民性に大きな影響を残していることは間違いない。やることなすこと全てが新しく、古くから伝えられた生活様式や伝統を頼りに行動を決めることができない。両国とも中世から伝承された「古典」を持たないのである。その中から国と文化を造った。

近代自然科学の考え方の根底をなす現代物理学が興ったのはたかだか 100 年と少し前なので、新興国家のアメリカにあっても、ヨーロッパやアジアとの比較において自国の伝統の欠如に劣等感を感じることはない。それどころか、ドイツなどからナチズムの暴力を逃れてやってきたユダヤ系学者を国内に取り込んだ結果、国際的に最強な自然科学の先進文化国家となっている。

このような自信に満ちたアメリカの自然科学研究者たちも、ヨーロッパやアジアのどこかの国に集って会合する時、主催者が息抜きに文化遺跡や、美術館、博物館などの見学をアレンジしてくれて、一緒に話をしながら見て歩くと、そこでは自分たちの国の歴史の浅さを痛感するらしく、悲しそうで悔しそうな顔をする。これは本人たちに責任がまったくないのだから気の毒な話である。

さて本題に戻って、伝統を持たない国で培われた美術や音楽、工芸などはどのような形態となるのであろうか。私はこの道ではずぶの素人でまともな意見は持ちえない。ただあえて言うなら、アメリカを代表して、例えばアンディ・ウォーホルの絵などを見ると、何かある種ヨーロッパに対する劣等感と、そこから来るのであろう反骨心や開き直りみたいなほとぼしりを感じず。こうした感じをすべてひと括りにして持つのは危険ではあろう。しかし、「新世界」にいる人間が作り上げる芸術が、かえってその伝統の無さを「バネ」に、国際舞台ではたしてどれだけ新しい動きを見せることができるのであろうか。それともアジア、ヨーロッパ、中東諸国の文化先進国のようになるにはあと何百年も待たなければならないのであろうか。

たしかに美術工芸の伝統作りには長い年月が必要とされる場合が多い。近くの例として日本美術の特質的伝統を考えてみる。日本の美の特徴のひとつに「装飾」がある、と言われる。工芸品に見られる「かざり」がその典型であろう。1 万年以上も前に日本の先住民の縄文人は世界最古の土器を作った。それには、縄を巧みに使い、しかもそれをさまざまに変形させて作った多様な飾りが施されている。この装飾性が日本人の美意識の原点をなすと言われ、それが 1 万年以上の期間を経て洗練され、奈良、平安、鎌倉時代の美術工芸品に採り入れられ現在に至っている。他方、日本の美の表現の中には、例えば「余白、余情、余韻」や「中心をもたない非対称性」の強調が見てとれる。これらは日本に育った独特の美意識の現れなのではないか。前者は、描き尽さない、全てを言い尽さないことが奥床しく、美しいと思う日本人の感性から来ているのであろう。絵画で言えば、下地の「白」をいかに際立たせるかに工夫をこらし、俳句や和歌では、数量や情景などをぼかして表現し読者に想像を膨らませようとする。そして後者の美的感覚は、例えば竜安寺の石庭とアルハンブラやヴェルサイユ宮殿の庭を比べて見れば一目瞭然であろう。整うことを嫌い、視点をばらまき、対称性をくずしたところに日本的な美があると言いたいかのようだ。

この日本の美的感覚は、ひとつはアニミズム的思想から来ていると言われる。日本には絶対的な神はいなかった。全てのものに精霊が宿る、八百万（やおよろず）の神。白い朝霧の向こうにも、雪の中にも海にも山にも、かまどの火の中にも神がいる。一神による絶対的な視点を否定する。「もの」を見るのにひとつの視点で見ない、などなどの古来から受け継がれてきた日本の感性が芸術的表現に影響を与えている。

世界の多くの国々にもそれぞれ古い歴史があり、その中でそれぞれ独自の美的感性が育まれてきた。それらが美術工芸や建築などに強い影響を及ぼし、近世の芸術品にもそれが反映されているのであろう。

やはり美を表現するには、本当に古い歴史が必要なのであろうか。

いや、そんなことはないだろう。古い伝統をもつ国の人だけが古い芸術性をもつことはないのであって、芸術の本質はそもそもそういう括りと縛りから超越しているはずである。

北米大陸には、まずアングロ・サクソン・ケルト系民族が移り住み、西に展開しつつも南部で農地が開墾されると労働力獲得のため、アフリカから黒人たちを強制連行し奴隷に仕立て上げた。遅れてイタリア、フランスなどのヨーロッパ諸国からも移民が流入し、カリブ海、メキシコからの移民も参入し多民族国家が造られた。そして、黒人奴隷たちの慰みの中からジャズやゴスペル・ソングが生まれ、イタリア系移民はマフィア組織も作ったが、映画やミュージカル芸術を産み出すのに大きく貢献した。フランス系移民は独特のクレオール文化を南部に残している。そして、このアメリカは近代建築やインテリア・デザインなどにおいても世界に冠たる芸術的な作品を産み出している。

もちろん、ヨーロッパの古典工芸や音楽に対しても強い憧れをもち、その吸収欲も学習熱も高かった。そのため、近世になりこれらの芸術も立派な進展を見せている。それはアメリカの大都市にある美術館やオペラハウスを訪れると良く判る。しかし、真にアメリカ的な独自の芸術は、前述のジャズにあり、映画などに強調される。これらは、まさしく伝統を持たない新興国の多民族共生社会であるアメリカの中から生まれ出た世界に誇るべき芸術であらう。

他方、オーストラリアはどうなのであろうか。実は私はこの方面の事情をほとんど知らない。アポリジニは抽象的なデザインの美しい色の絵や彫り物を作っている。メルボルンの国立美術館も立派であるし、そこに隣接する芸術大学も活発であり、ビクトリア州には芸術省があることは知っている。芸術の振興に熱心であることは間違いない。さてこの国でどういう芸術が生まれつつあるのであろうか。

オーストラリアこそ正真正銘の多民族共生社会である。建国はアメリカより新しく、第2次世界大戦後に大量の移民を迎えた。その数たるや人口比の数 10%に及び、それはイスラエル建国時と比肩しうる民族大移動であり、その出身は東部、南部ヨーロッパからアジア諸国、中南米を含み 130 ヶ国を越え世界に類を見ない多様さである（この会報末尾付録を参照）。この急激に多様化した社会をまとめるに当たって、オーストラリアはかつての「白豪主義」、すなわち、アングロ・サクソンの宗教や生活様式を単一文化として至上のものとする考え方から、必然的に価値観の多様性を認め多民族が共生しうる「多文化主義」に政策転換したのであった。現実問題として、民族的多様性を国の活力にせざるを得なかったのである。

この路線は同じ多民族社会の先輩国家アメリカとは異なっている。そして、決定的な相違は、アメリカが自ら宗主国である英国に戦争をしかけて独立を勝ち取った点にある。オーストラリアは、未だに英国国王を戴く立憲君主制で英連邦に属している。この事実は、国としてのアイ

デンティティを強く持ちうるか否かでそれぞれの国民性に大きな影響を与えている。その結果、アメリカでは、多民族それぞれに違うさまざまな価値観をひとつのアメリカ文化という枠の中に融和させつつ、それを進化発展させようとする同化主義路線に沿って社会を造ってきた。この中ではそれぞれの民族が持っている独自の価値観や生活様式は原型を留めず砕かれひとつの文化の中に組み入れられる。

一方、オーストラリアでは異なった文化や伝統をもつ人間がひとつに集って、混然としながらも多様性をもつ新しい文化、国家を造り上げようとしている。それ故、オーストラリアはサラダ・ボウル型社会と呼ばれる。それを見るにはメルボルンに行くが良い。メルボルンはオーストラリアの中では古い街並を持ち、人口規模は日本の中小都市サイズでしっとりとした良い町である。その中心近くには中華街があり、少しはなれてギリシャ人やベトナム人の集落がある。そして、町はずれのメルボルン大学の隣には多勢のイタリア人が住みイタリアン・パブやリストランテが沢山並んでいる。これらの集落に入ると英語ではなくそれぞれの国の言葉が飛び交っている。これでこの町はひとつの方向性を持って統治されていくのだろうか、と日本人なら心配してしまう。

オーストラリアのこの多文化主義による多民族共生の路線はまだはじまって半世紀にならない。しかし、壮大な実験とも言える、国家とそこに育つ文化創成の営みがどのように芸術に反映されていくかを大きな期待をもって見守りたい。

■付録 オーストラリアを知ろう

オーストラリアにとって日本は過去 40 年最大の輸出国であり、経済復興を助けてくれたありがたい国である。このことが太平洋戦争における日本軍のオーストラリア兵捕虜に与えた残酷な行為がもたらした強い反日感情を表面的に抑えてきた。資源のない日本にとっても、オーストラリアは石炭や鉄鉱石などの天然資源を供給してもらえる大切な国であり、車やコンピューターなどの工業製品を大量に買ってくれる良き貿易相手である。また、新婚旅行や海での遊びに年間 70 万人近くの日本人が訪れ、気候の良さや地価、物価の安さに多くの老人夫婦が移住する。最近ではイラクに派遣された日本の軍隊をオーストラリア軍が現地で護衛してくれた。このような良好な蜜月期間を共有してきた両国であるが、はたしてお互いに相手のことをどれくらい知っているのだろうか。どういう歴史をもった国なのか、そして、そこからどのような文化や気質が生まれ人情をもつに至ったのであろうか、何を楽しみに暮しているのだろうか、などなど少し立ち入れば知らないことの方が多いのではないか。

顔の見えない文化交流は意味をもたない。まずは相手のことを知らねばならないし、同時にこちらの心と文化を正統に伝えなければならない。

日豪友好条約締結直後の 1977 年に、我々の会が松岡朝女史を中心に大量の汗をかいてオーストラリア国民に国宝級の日本画 25 点を寄贈した。これは大変センセーショナルな出来事であったが、その大きな寄贈理由として、当時急増しつつあったオーストラリアからの天然資源の供給が安定に続けられるように、との願いが込められていたと聞く。このことは、当時の時代背景を考えれば仕方がなく、故無しとはしないが、それから 30 年を経た現在では、この当

会の為した大事業を、日本画紹介を通し真の文化交流に繋がり広がる良い基盤となるように再考したい。

くり返すが、真の国際交流は相手を知ることからはじまる。以下はオーストラリアに関する情報である。限られた項目ではあるが、オーストラリアを知るのに少しは役立つと思うがいかかであろうか。

なお、数字データは2003-6年の情報を基にしており少しのぼらつきはお許しいただきたい。
(大谷俊介 記)

面積	約 770 万 km ² (日本の 21 倍、アラスカを除く米と同じ)
人口	約 2000 万人 (日本の 1/6)
首都	キャンベラ (人口 32 万人)
言語	主に英語
人種	アングロ・サクソン系が中心、約 130 ヶ国からの多くの移民がいる
宗教	キリスト教 (カトリック、英国教会) 65%、他宗教 20%、無宗教 15%
政治	立憲君主制、元首はエリザベス英国女王、1901 年豪州連邦成立
議会	議会制民主主義、二院制 上院：保守連合 39 名、労働党 28 名、他 9 名、任期 6 年 下院：保守連合 87 名、労働党 60 名、他 3 名、任期 3 年
首相	ジョン・ウィンストン・ハワード、在位 10 年
内政	連邦制 (6 州+2 特別地域、連邦の立法権限は国防、外交、通商、 租税、通貨、移民などに限定、その他はすべて州の権限)
軍事力	予算：約 156 億豪ドル (国家予算の約 8%、日本の 1/4) 現役兵力：約 52,000 人 (日本 15 万人)
平均寿命	81 歳 (日本 82 歳)
スピリッツ	マイトシップ (mateship の豪州訛り、相互扶助、平等主義)、 フェアゴー (公平に行こう)
幸福度	世界第 3 位 (デンマーク 1 位、スイス 2 位、米国 30 位、中国 82 位、日本 90 位、 ……ブルンジ 178 位) ——2006 年英レスタ大学調査、生活満足度、寿命、国内総 生産、教育体制などから算出——
牛肉消費量	1 人当り 40kg (日本 10kg、アルゼンチン 59kg、米国 44kg)
インターネット	利用者 1 千万人 (日本 5 千万人、米国 1.7 億人)
国内総生産 (GDP)	約 4000 億米ドル (韓国とほぼ同じ、イギリス、フランスの 1/2、日本の 1/10、米の 1/25)
国民総所得 (GNI)	一人当りの所得、約 2.2 万米ドル (イタリアとほぼ同じ、日本の 0.64 倍、 米国の 0.58 倍)
為替	豪州ドル (A \$), 1A \$ = 約 90 円 = 0.77 米ドル
消費税	10% (日本 5%、デンマーク、スウェーデン 25%、イギリス 17.5%)
貿易	輸出：約 300 億豪ドル、1) 石炭、2) 鉄鉱石、3) 原油 1) 日本 (20%)、2) 中国 (10%)、3) 韓国 (8%) 輸入：約 1500 億豪ドル、1) 乗用車、2) 原油、3) コンピューター

1) 米国 (14%)、2) 中国 (13%)、3) 日本 (12%)

在留邦人 約 53,000 人

在日豪州人 約 12,000 人

在豪留学生 シンガポール、香港、マレーシア、インドネシア、(それぞれ約 2 万人) 中国 (1.5 万人)、韓国、インド、日本 (それぞれ約 1 万人)

旅行者数 オーストラリアへの年間人数 (ニュージーランドを除く)、

1) 日本 (66 万人)、2) イギリス (63 万人)、3) アメリカ (42 万人)、4) シンガポール (30 万人)

国家の成立

- 5-6 万年前 アボリジニ (世界最古の文化を伝える民族) がニューギニア、スリランカ方面から移住。500 部族、30 万人が石器時代と同様の狩猟中心の平和な生活を営む。その後、上陸した英国系移民に大半が虐殺された。
- 1770 年 英国人キャプテン・クックがエンデバー号でシドニー郊外のボタニー湾に上陸、付近をニューサウスウェールズ (英国ウェールズ地方に似ていた) と名付け英国領有宣言。
- 1788 年 フィリップ英国海軍大佐が 750 人の囚人男女を引き連れシドニー付近に入植。以前の流刑植民地であった米国が独立を勝ち取ったため、産業革命以来急増した失業者が犯罪人となり、米国に代る新しい囚人送付先としてオーストラリアが選ばれた。その後オーストラリア全土に流刑囚が入植し開拓を続けながら順次自由移民を増やしながらか展開した。1829 年には全土の領有を宣言する。
- 1851 年 シドニー西のバサーストで金鉱発見。直ぐにビクトリア州でも大鉱脈が発見され、メルボルンの街を活気づけゴールドラッシュがはじまる。そして、米国西部のゴールドラッシュと同様、多勢の中国人労働者が金塊を求めて流入するようになった。彼らの勤勉さと団結力はオーストラリアの人たちに違和感と警戒心を与え、ついには有色人種排斥の白豪主義に走る結果となった。
- 1901 年 豪州連邦成立 (植民地域が州となり憲法を制定、白豪主義に基づく白人国家を目指す)。
- 1986 年 オーストラリア法制定 (州最高裁の上訴権を放棄するなど英国からの司法上の完全独立を獲得)。

日豪関係

- 1620 年代 タイに日本人町を造り活躍した山田長政が訪豪したとの記録 (未検証)。
- 1859 年頃 横浜開港後居留地に多くのオーストラリア人が去来。
アレキサンダー・マークス：親日実業家、13 年間滞在、帰国後メルボルンで日本側総領事となる。
ジョン・ブラック：近代的な本格的日本語新聞「日新真事誌」を発刊。
ヘンリー・ブラック：ジョンの息子で芸名「快樂亭ブラック」という落語家

- となる。日本女性と結婚し帰化。
- 1901 年頃 連邦国家が成立する直前の人口は約 320 万人、その大部分が東南部の沿岸域に居住。その頃、クィーンズランド州など北部域に少数のオーストラリア人とともに 3000 人を越す日本人が働いていた。貝やなまこの採集でヨーロッパやアジア諸国との貿易活動に従事。
- 1909 年 オーストラリア聖心会のマザー・サルモンが教皇ピウス 10 世の依頼で東京、白金に聖心女子学院を創立。
- 1914 年 第 1 次世界大戦、オーストラリアは英国の援軍アンザック（オーストラリア、ニュージーランド軍団）として参戦。英軍事大臣チャーチルの軽率、無謀なトルコ・ガリポリ半島上陸作戦などに巻き込まれ多数（6 万人）の戦死者を出した。（参照、パラマウント映画「ガリポリ（誓い）」1982 年ピーター・ウィア監督、メル・ギブソン主演）日本は日英同盟のため連合側側に立ち、東南アジア、大平洋に進出し、オーストラリアに警戒感を抱かせた。
- 1939 年 第 2 次世界大戦（太平洋戦争）。1942 年、英領シンガポール陥落、オーストラリアも参加した英連邦軍敗退。その後日本軍はオーストラリア北部のダーウィンを攻撃、シドニー湾にも進攻。建国史上はじめて自国土を侵略された。加えて、日本軍によるオーストラリア兵捕虜（2 万人強）に対する、泰緬鉄道建設での強制労働などの非人道的虐待行為（計 8 千人が死亡）により対日感情が悪化。これらはシドニー郊外のカウラ収容所における日本兵捕虜の集団脱走で自決したり死亡した日本人を手厚く葬ったオーストラリア側の対応と好対照。オーストラリア兵捕虜に対する日本軍の残虐行為、および、日系オーストラリア人を収容所に送ったオーストラリア政府の行動に対してはその後お互いに、公式には何の言及も補償もしていない。それらは未決の戦後処理として残されたままである。
- 1957 年 日豪通商協定調印。高度成長の兆しの見えはじめた日本が重要な貿易相手国として登場し、悪い対日感情を抑えてでも協定を結ぶ価値ありとの判断。
- 1976 年 日豪友好協力基本条約締結。この条約はオーストラリアで有名な日本の古都名を引用し「日本・オーストラリア・関係・協定」の頭文字を並べ NARA 条約と呼ばれる。この種の条約を結んだ国は歴史はじまって以来、日本以外にない。従来の英国志向の外交をアジア太平洋向けに移行させるため、その最初のパートナーに日本を選んだ。1960 年代後半から英国を抜いて日本が最強の貿易相手国となり、反日から蜜月時代への変換期を迎えた。加えてこの NARA 条約を契機に、新興国家オーストラリアが、日豪関係をこれまでの資源貿易だけでなく伝統国家日本との文化交流を促進させたいとの期待が込められている。実際にこの時期から日豪関係は一層親密化し、現在では世界で最も日本語学習熱の高い国となった。なお、経済面では 1967 年以来日本はオーストラリア最大の輸出市場でありつづけているが、中国市場が急台頭し早晚追い抜かれるであろう。
- 1989 年 アジア太平洋経済協力会議 (APEC) の成立。日豪関係を中心に周辺地域に経済交流を広げる意図をもつ。

多民族社会

第2次世界大戦時の日本軍の侵攻に怯えその恐怖感を根底にもち、戦後の経済発展による国力強化を最重要視した。そのため労働力増強を求め、英国、アイルランド系以外の東都、南都のヨーロッパ諸国から、さらには中東、アジア、南米からの移民や難民を受け入れた結果多民族国家となった。そして、マイトシップの輪を英国、アイルランド系以外の民族集団に広げることにより、白豪主義を棄て必然的に多文化主義社会となった。現在、海外生まれか、親の片方が海外生まれというオーストラリア人は40%を超える。これらの移民の母国は以下に示される。

イタリア系(80万人)、ドイツ系(74万人)、中国系(56万人、華僑含まず)、ギリシャ系(38万人)、オランダ系(27万人)、北米系(20万人)、レバノン系(16万人)、インド系(16万人)、ヴェトナム系(16万人)、マルタ島系(14万人)、フィリピン系(13万人)、クロアチア系(10万人)、セルビア系(10万人)、アボリジニ(10万人)、他 マケドニア、スペイン、フランス、ハンガリー、ロシア、トルコなど(それぞれ5-8万人)

この急速な多民族共生社会の形成は、英独仏と同様に戦後の労働力補強ではじまった移民受け入れ政策によるもので、世界の130を越す国から450万人の人びとがはるか遠くのこの国に移住してきた。戦後史の中で人口比ではイスラエル建国に次ぐ民族の大移動であり、出身国の多様性では他に類をみない。

白豪主義という異質の他者排除から共生への転換に際して、意識と感情がそれに追いついていないとは言いがたいが、アメリカをはじめ多くの他国の例に見られるような移民の自国への同化を強く求めず、それぞれの文化と価値観の多様性を尊重し多文化主義社会への道を探っている。それは異質な材料を砕いてひとつのスープを作り上げるのではなく、むしろ多様な味を活かそうとするサラダ作りに似ているところから「サラダ・ボウル」型社会と呼ばれる。

自然 ブッシュ(アウトバック)とビーチ

オーストラリアで言う「ブッシュ」は、普通の英語での「灌木の茂み」とは異なり「奥地、田舎」の意味も持っている。アボリジニの多くはブッシュに住んでいるが、オーストラリア人が特に「ブッシュマン」と言えば、めったにはいない「奥地に住む白人」のことを指す。「アウトバック」はさらに奥地のことで、迷い込めば生きては帰ってこれないかも知れぬ最果ての地域を言う。オーストラリアでは大部分の人口は沿岸部に集中し、内陸に住む人はほとんどいない。このブッシュ(アウトバック)帯はまことに広大で、日本全土がいくつもすっぽりと納まる面積をもち、その広さは我々小さな島国に住む人間の想像をはるかに越えている。例えば大陸横断道路でとなり町に行こうとすると、そこは東京から名古屋ぐらいの距離があり、車で走っている間にすれ違う車1台もなく、動物以外に人影を見ることもないのが普通であると言う。この広漠たる大地を郊外に持つことが独特の国民性を育てているとも言われる。

もうひとつのオーストラリアの大自然はビーチにあり、それを代表するのが北東部の太平洋岸にある「グレート・バリア・リーフ」であろう。珊瑚礁は言うまでもなく海洋生物であり、

それが長さ 2000Km の大きさを成長を続けている世界最大の珊瑚礁をグレート・バリア・リーフと呼ぶ。月から地球を見て、それと判る構造体は、極地の氷の大地、アマゾン河、万里の長城など限られたものだけであるが、このリーフははっきりと観測しうる唯一の地球の生命体としてその名を轟かす。11 月下旬からの初夏の頃の満月の前後が絶好のリーフ・ダイビング鑑賞期と言われるが、海中散歩が好きな人にとって一生見つづけても飽きない光景を年間を通して提供してくれる。そして、真夏のビーチで気の合った仲間たちとバーベキューを囲み大晦日を過ごし、新年を迎えるのがオーストラリア人の楽しみとなっている。

スポーツ クリケットとオーストラリアン・フットボール

もちろんラグビー、サッカー、テニス、ゴルフにもファンが多いが、何と言ってもオーストラリアで盛んなスポーツはクリケットとオーストラリアン・ルールズ・フットボールであろう。クリケットは街角でも少年たちが好んで興ずる最もポピュラーなスポーツ。卵型の球技場で催されるクリケットはたった 2 イニングに数日間もかかることもあるらしい、それを国民は好んで観戦する。毎年、夏のシーズンになると英連邦諸国（英・豪・ニュージーランド・インド・パキスタン・南アフリカ・西インド諸島など）で世界選手権が競われ、各国とも熱く応援する典型的なアングロ・サクソン・スポーツである。

一方、オーストラリアン・ルールズ・フットボールは、クリケット選手がシーズンオフ用に考え出したオーストラリア独自の競技で、サッカーとハンドボールを合体したようなスピード感溢れる、クリケット場で行われる球技である。メルボルンが最も盛んな街であるが、今や全国規模で国民の 2 人に 1 人が球技場に足を運び観戦すると言う。クリケットは紳士的で穏やかなスポーツだが、このオーストラリアン・ルールズ・フットボールはホットパンツにランニング姿で大男が入り乱れて走り回りゴールを狙うセクシーかつワイルドなスポーツで、9 月、10 月の春先のファイナルマッチには国中が熱狂する。

参考文献

1. オーストラリアを知るための 55 章、第 2 版、越智道雄著、明石書店 2005 年
2. オーストラリア物語、遠藤雅子著、平凡社新書 2000 年
3. オーストラリアの歴史、藤川隆男編、有斐閣アルマ 2004 年
4. オーストラリア 6000 日、杉本良夫著、岩波新書 1991 年
5. オーストラリア解剖、永井浩著、晶文社 1991 年
6. オーストラリアを知っていますか、大野アイ子著、慶済堂 1991 年
7. ナマコの目、鶴見良行著、筑摩書房 1990 年
8. ホームページ：<http://yoe.australia.or.jp/af/>

会からの報告 & お知らせ & お願い

■青盛のぼるチャリティコンサート

2007年5月18日(金)、東京・赤坂の霊南坂教会で、ソプラノ歌手青盛のぼるさんのコンサートを予定しています。

ごく最近、青盛のぼるさんのリサイタルを聴きにいった会員の感想——最近、海外公演でマダム・バタフライの主演を演じた後は、一段と声に磨きがかかり、こんどの海外と文化を交流する会コンサートは、大好評だった前2回のコンサートを以上に、皆さまを魅了するでしょう。

■寄付をいただきました

渡辺いつ子さまから日豪交流年メルボルン記念展へ、M&Dからもご寄付をいただきました。

■会費納入のお願い

2006年度の年会費納入さらに2004年度2005年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

とりわけことしは「メルボルン日本画展」という大きな事業を控えています。日本文化啓蒙のいい機会です。前述したように講演とデモンストレーションをおこないます。さらに将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会
銀行振込 東京三菱UFJ銀行渋谷支店(普) 2266599 海外と文化を交流する会
会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigaibunka.org>